

特集  
3

# 子どもの事故防止のために 求められる製品を考える

杉山 智康 Sugiyama Tomoyasu 特定非営利活動法人キッズデザイン協議会 事務局長

## キッズデザインと キッズデザイン協議会

子どもたちが、安全安心に、そして創造的に暮らせる社会の実現をめざす「キッズデザイン」という考え方があります。

この「キッズデザイン」は、「子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン」「子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン」「子どもたちを産み育てやすいデザイン」という3つのデザインミッションから構成されます。

特徴としては、外観の「意匠」や「造形」といった狭義のデザインにとどまらず、「機能」や「制度」なども含めた広義のデザインを指していること、子ども向けの玩具などだけでなく、子どもが触れたり、かかわりをもつ可能性のあるすべての製品、建築・空間、サービスを対象にしていること、が挙げられます。

この「キッズデザイン」の普及、推進を中心的に行っているのがキッズデザイン協議会です。

### ☒ キッズデザインマーク



2007年にNPO法人として認証された団体で、2020年5月現在の会員数は111を数え、さまざまな業種の企業、自治体、大学、研究機関、医療機関、デザイン団体など、まさに産官学横断的な構成になっています。

## キッズデザイン賞と キッズデザインの標準化

「キッズデザイン」の中でも、子どもたちの安全安心に関する取り組みとして、当協議会では主に次の2つの活動を行っています。

1つは、キッズデザイン賞\*1の主催です。この賞は、前述の3つのキッズデザインミッションを実現し、普及させるための表彰制度です。2007年に創設され、これまでの累計の受賞点数は2,968点に上り、その約3割が安全安心部門での受賞です。

子どもや子どもの産み育てに配慮した、すべての製品、空間、サービス、活動、研究が応募対象になり、受賞作品は「キッズデザインマーク」を使用することができます(☒)。

これにより、キッズデザインという価値の見える化を図っています。

もう1つが、キッズデザインの標準化です。「キッズデザインガイドライン—安全性のガイドライン」を作成し、これに基づいた「CSD認証\*2」を2013年に開始しました。

これは、製品などに定められている安全基準や規格の遵守<sup>じゅんじゆ</sup>だけでは解決できない子どもの事故に対して、実際に起きた事故や類似の事故の

\*1 <https://kidsdesignaward.jp/>

\*2 CSDはChild Safety through Designの略称。 <http://www.kidsdesign.jp/project/certification/csd.html>

情報に基づいて、キッズデザインガイドラインを遵守し、キッズデザインプロセス<sup>\*3</sup>を循環させることで、安全性向上のプロセスを経ていることを認証する制度です。

さらに、キッズデザインガイドラインをベースにしたJIS原案作成に取り組み、「JIS Z 8150 子どもの安全性－設計・開発のための一般原則」が2017年に発行されました。このJISは、子どもの安全に配慮した製品作りのいっそうの促進を目的としており、事故情報の収集・分析や子どもの特性の理解などの科学的なアプローチを行い、それに基づいたリスクアセスメントや事故防止対策を行うことを規定しています。

### 製品開発に求められる 子ども視点

事業者が製品開発するうえで、「子どもは小さな大人ではない」という認識を前提にすることが大変重要です。

子どもは、特有の身体特性、行動特性を持ち、身体・能力ともに急速に発育・発達します。さまざまなものへの興味・関心や好奇心による想定外の行動も、子どもの発育・発達の過程ではごく自然な行為です。大人の尺度でいうところの、いわゆる「誤使用」の概念は、子どもには存在しません。

子どもの安全を考える際の基本は、こういった特性、特徴への考慮、配慮を行いながらも、子どもの自然な行動を阻害することや、子どもが身に付けるべき危機回避能力の育成を妨げることなく、なおかつ重篤な事故を繰り返さない対策を打つことが肝要であると考えます。

キッズデザイン賞の受賞作品には、過去の事故から学び、課題解決に向けた工夫を施した好事例が多数あります。例えば、一定の力が加わると、スライダーが外れる解放機能を備えた

ファスナー、発生した蒸気を水タンクで冷却することで外部に蒸気が出ないように蒸気レス化を図るとともに、転倒しても熱湯の流出を最小限に抑える機能を備えた電気ケトル、底面の吸盤がテレビ台に吸着することで転倒を防止する機能を備えたテレビスタンドなどです。

これらの事例からは、首が絞まることでの窒息、湯気や熱湯によるやけど、重量物の下敷きといった過去の事故と「同様の事故を繰り返さない」という真摯な姿勢<sup>しんし</sup>がうかがえます。

### 今後の取り組みと課題

当協議会では、キッズデザインの国際標準化に向け、JIS Z 8150で規定した子どもの安全性を含んだかたちで、子どもの特性に配慮した製品・サービス・システムの開発を行うためのガイドライン原案をISO(国際標準化機構)に提案中です。

このような子どもの安全に関わる標準化の取り組みは、国内でも近年増えつつありますが、欧米と比較して、対象となる製品・サービスの広がりはまだ限定的です。今後、標準化の取り組みの裾野がさまざまな業界や団体へと広がり、さらに多くの製品・サービスを対象にしたJISやISOの制定が加速されることが期待されます。

また、いっそうの子どもの安全性向上のためには、「事故情報が水面下に潜んでいて、社会で共有されていない」「使用によって生じるリスクが消費者に十分伝わっていない、あるいは、消費者が十分理解していない」といった課題の解消に向け、事業者、消費者に加え、行政、医療、研究、教育、保育、当協議会のような団体など、子どもや子育てに関わる幅広い関係者の連携による、事故をはじめとした情報の共有と活用を可能にするしくみの構築が望まれます。

\*3 デザインコンセプト、デザインレビュー、カスタマーコミュニケーション、事故情報・ユーザーニーズ収集・分析で構成される。